

感謝箱献金だより

# ガリラヤのほとり 33 号

## 「一期一会」



東京教区主教

フランシスコ・ザビエル 高橋宏幸

千利休によって改革されました「佗茶」が「一期一会」の精神を重んじているのは、いつ戦場の露となるか予想できない者同士が戦に赴く前に胸に抱いた「これ限りの二度と無い今に心を籠める」ことをとても大切にしている証と言えましょう。亭主と客は、これが今生の別れとなるかも知れぬという思いで二度と無い時の重さを味わい、今という二度と無い時に心を籠めながらお茶を点て、服する。そこには授かっている一瞬一瞬を大事に生きる心が鮮やかに醸し出されています。まさに、今に心を込めて生きると言えましょうが、「今」という文字に「心」という文字を加えますと「念」という字が出来ます。念じること即ち、祈って生きるとは、今という二度と戻らない時に心を籠めて時を過ごすことと言えましょう。

あるいは、世間ではキリスト教の十八番と言われている「愛」という言葉も、全く違った意味で芸能番組などから目に飛び込んできます。そこには、五百年近く前イエス様の福音を携えて日本の地を踏んだ宣教師たちが命懸けで伝えた「ゼウスのご大切」と訳した「神様の愛」の心は、スッポリ抜け落ちていると言わざるを得ません。けれども、抜け落ちているとするなら、今こそ再びその「ご大切な心」が求められて良いはずです。神様からの授かり物である命が軽く扱われる傾向が強まれば強まる程、却って「ご大切な心」である神様の愛、神様からの愛、即ち「ご大切な命」への心を取り戻すべく努力の時が今再び舞い戻ってきたとも言えましょう。

そのような中で聖書が主張し続けていることは「命の肯定」、つまり誰一人、自らの力によって命を手に入れ、この世にやって来たのではなく、命とは尊い授かり物であるということ、教会はいつの時代にも声を大にして言い続けてきたはずで、「私たちの命は、神様にとっての大切な命なのだ！」と。しかも、「その命は条件付きで愛されたり、愛されなかったり、大事にされたり、されなかったりなどということがあってはならないのだ！」と。

「感謝箱献金」の尊いお働きが、イエス様の心を引き継ぎ、神様に祝福されたものとなりますようお祈りいたします。

# お献げ先からのおたより

## 2019 年「ニームの会」研修ツアーの報告

山下明子

2019 年にはニーム・ツアーは行わない、と考えていたのですが、現地の状況がとても悪く、プレマたちも非常に待っていると知って、行くことにしました。幸い、貴感謝箱献金から 20 万円、NCC の世界祈祷日献金からも 10 万円を、私が現地へ持参できるということで頂くことができました。心より感謝申し上げます。



ニームの会のツアーは現地の心づくしのせいもあり、本当に毎回、参加者に喜ばれます。ただ今回は、最初に訪ねたカルナータカ州のクリスチャン・アシュラム「雀の宿」はともかく、タミル・ナードゥ州の WOLD や他のキリスト教 NGO はいつものツアーとはかなり状況が異なりました。これらの団体が長年活動してきた村々には全く入れなくなっていたのです。

ニーム研修ツアーが第 1 回からずっと宿泊所にしてきた WOLD 農村女性センターは、質素だけど緑に囲まれて気持ちのいい自然豊かな環境です。ところがこのセンターに今回、私たちは宿泊できませんでした。理由の一つは雨期になっても雨が降らず、木々が枯れていたところに突然の連日の雨で、蚊が大量発生しました。雨はむしろ大歓迎ですが、プレマたちは 2 番目の理由もあり虫害を心配したのです。二つ目のより大きな理由は、このセンターが村のヒンドゥー教徒の脅しにあっていたことです。椰子の葉で屋根を葺いた大きな丸テーブルの天井に取り付けられていた扇風機が、夜の間に盗み取られ、電灯も壊されたのです。室内へのドアも破られていました。ずっと以前、まだ WOLD が女性たちの自助グループづくりの活動をする前にも、ドアが破られて、中の天井用扇風機とミシンがすべて盗まれ、しかも小屋に火を付けられるという事件がありました。今回は「出て行け」という脅しだということです。



「ここはキリスト教で、外国から金をもらって宣教している」というフェイク・ニュースが流されているとのこと。私たちは WEL というダリットの女性団体に宿泊させて

もらい、翌朝 WOLD センターに行きました。私たちを歓迎するバナーがいつものように貼られ、村から来てくれた女性たちが歓迎式をしてくれました。

前回記念に植樹したココナツの木も、その他たくさんの木も雨が降らないせいで枯れてしまっていました。しかし、残った木々や花々は雨で勢いを取り戻し、干上がっていたという畑も草で青々としています。ここにまた有機栽培でお米や雑穀、





その他の野菜を植えます。女性たちが働いて日当を得、収穫物を野菜市に運んで売ります。WOLD にとっては費用のほうがかかるのですが、まず美味しく、しかもここで働くダリットの女性たちの収入にもなります。その為にも常勤の夜警を雇い、プレマたちもここに住む必要があります。まずドアを修理し、天井の扇風機や電気をつけなければなりません、頂いた献金が役立ちます。

今回、私たちは幾つかの私立学校を訪ねました。インドの公立学校は無料で、先生の給料もいいのですが、時間になっても始まらなかったり、先生が来なかったりします。とくに村の学校はひどい有様ですが、ダリットの子どもたちは学校に行けてもこの政府の学校です。一方、競争激しい私立学校の特徴は、中流家庭以上の生徒で、英語媒体が多いことです。3歳児から10年生の15歳までが同じ学校で学びます。インドは州によって言語が異なるので、とくに南インドでは共通言語として英語で教育するということもあります。これらの学校は公立学校とは違って時間通りに熱心に授業しており、いじめや登校拒否について生徒に訊ねても、きょとんとされました。先生たちも給料は安いものの、授業が終わると4



時迄には生徒たちと同じスクールバスで帰宅できます。今回のツアーに参加した小学校の先生はとても羨ましがっていました。日本では考えられないからです。

ヒンドゥー至上主義の政権下で、それを受け入れないクリスチャン・ダリットや原住民族、またイスラーム教徒への弾圧が強まっています。WOLDのように現在の状況は困難でも、宗教やカースト差別をこえて貧困女性たちの自助グループをたくさん創ることで地域全体を大きく変えてきたところは、そうでない酷い地域とはやはり異なっています。大変な状況のなかでも頑張ろうとしている WOLD を今後も応援したいと思います。



## 「ワンダ임」よりご報告

執事 洗礼者ヨハネ 大和孝明

このたびは、NPO法人「ワンダ임」に皆様のご支援をいただきましたことを、心より感謝申し上げます。「ワンダ임」の活動は「海外医療協力部会」「歴史理念伝承部会」「環境交流部会」に分かれています。本稿では特に「海外医療協力部会」による、「バングラデシュへの医療派遣活動（2019年9月6日～16日）」について報告したいと思います。

参加したメンバーは酒井典子医師（県立こども病院／整形外科）鳥海勇人医師（新生病院／脳神経外科）寺島左和子医師（新生病院／形成外科）酒井洋





徳医師（信州大学付属病院／歯科口腔外科）の4名です。派遣活動場所は、少数民族のガロ族が住んでいるバングラデシュ北部の農村、ジョイムラクラ村にある、クリスチャン・ヘルス病院でした。

2017年に首都であるダッカでテロ事件があり、日本人も犠牲になりました。この事件のため一時中断していた医療支援を、このたび再開することが出来ました。

病院はダッカ国際空港から車で約4～5時間の距離にあります。経済的な問題などから十分な医療を受けられず、病気や不自由を抱えたままの大人や子供達がたくさんいます。病院到着後、メンバーはスタッフの歓迎を受け、さっそく診療開始。朝からめまぐるしいスケジュールで、休む間も惜しんで深夜まで診療にあたりました。合計282名を診察し、72件の手術を行いました。また現地の医師・スタッフへの教育（手術や感染リスク、治療についても実施しました。院長先生ご夫妻やスタッフ、看護師や助産師のみなさんは、熱心にメンバーに付き添ってくださり、様々なことを吸収しながら共に活動をする事ができました。無事に医療協力を終えられましたことを、主に感謝したいと思います。

「ワンダタイム」はこのほかにも、ネパールへの医療派遣にむけた視察（4月27日～5月4日）や、ミスパウル保育園の子供達を対象とした「おはなしの会」（歴史理念伝承部）、新生病院敷地内の緑化・メイプル植樹（環境交流部会）など、様々な活動を2019年中に行いました。

「ワンダタイム」とは、1ダイム、つまりカナダの硬貨のことです。長野県小布施町の新生療養所（現・新生病院）設立にあたり、カナダの教会の子供達が、1ダイムをピカピカに磨いて献げてくださったことを記念して、私達はこの名前を付けました。



また「感謝箱」は、かつて数名の女性信徒達が始めた「メリーの友の会」を起源とするお働きであると伺っています。この「感謝箱」の働きによって、「ワンダタイム」が力をいただくということ…そこにはかり知ることのできない、神様の「小さいけれども確かな、奉仕と感謝のリレー」が行われているように思います。



そしてそのリレーのバトンは今、バングラデシュの兄弟姉妹や、日本の子供達、女性達、高齢者の方々へと、手渡されているのです。私達はこれからも「ワンダタイム」の精神を胸に、未来への希望を繋ぐ活動を行っていきます。皆様のお祈りを、どうぞよろしくお願いいたします。



## 行ってきました



### ◇ 2019年3月30日 リグリマ・ジャパン報告会

上澤伸子代表による報告

東京教区池袋聖公会伝道所

お献げ先の手工芸品を販売

### ◇ 2019年5月3日 東神バザー

横浜教区横浜山手聖公会

お献げ先の手工芸品を販売

### ◇ 2019年5月14～15日 横浜教区婦人会大会 神奈川県大磯町

お献げ先の紹介と手工芸品を販売

### ◇ 2019年6月12～13日 日本聖公会婦人会総会 北関東教区志木聖母教会

2日目に映像資料を使い感謝箱献金のアピール

お献げ先の手工芸品を販売

### ◇ 2019年6月26日 横浜教区社会委員会主催 難才連面会支援 東京入国管理局

### ◇ 2019年7月14日 感謝箱献金、リグリマ・ジャパン

上澤伸子代表によるバングラデシュ訪問の報告

東北教区仙台基督教会婦人会主催で行われました。

感謝箱献金のスタッフは仙台基督教会の皆さんと共に朝の礼拝をお献げして、昼食も一緒に頂きました。

三陸わかめを使って作られたうすい青緑のうどんがとても美味しく、お話しもはずみました。三陸わかめは東日本大震災支援として皆さんにご支援頂きましたが、わかめうどんは初めてでした。

地方によっていろんな支援をしてらっしゃるのをこの目で見て頂けるのは、感謝箱献金スタッフへの神様からの恵みと感謝して帰ってまいりました。

お献げ先の手工芸品を販売したミニバザーも盛況でした。

「お献げ先の生きた活動を直接おききすることで、感謝箱献金の働きが立体化され、より身近なものになりました」とご感想を頂きました。



上澤さんも現地の衣装を身に付け  
商品説明



☆ 2019年9月29日 **サイディア・フラハ報告会** 横浜教区静岡聖ペテロ教会

一時帰国されていた荒川勝巳氏から  
現地の近況をお聞きしました。

男性信徒の方々も参加されケニアの  
政治・社会情勢について多くの質問  
が出され、荒川氏が丁寧にご説明下  
さいました。

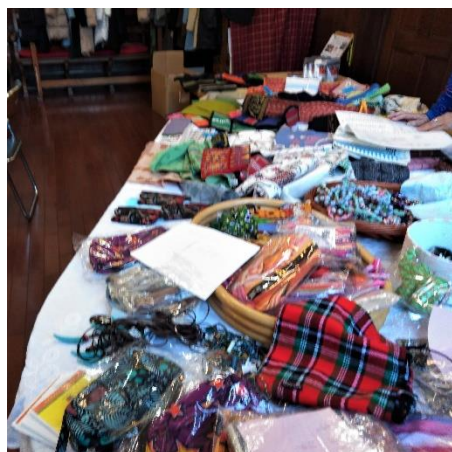
「文面だけでなく、荒川氏のご報告  
により感謝箱献金についての意識が  
深まったと感じています」というご  
感想が寄せられました。

お献げ先の手工芸品を販売



☆ 2019年10月10日 横浜教区社会委員会主催 **難民連面会支援** 東日本入国管理センター

☆ 2020年1月22日 **横浜教区婦人会総会** 横浜教区横浜聖アンデレ教会  
お献げ先の紹介



「お献げ先の手工芸品を販売」は

「サイディア・フラハ」「リグリマ・ジャパン」の  
アクセサリや 細かな刺繍も入った衣料雑貨などです。  
毎回たくさんの方にご協力いただき、ありがとうございます。  
売り上げは各団体に送らせていただいております。



### 感謝箱献金のいのり

神さま、今日もみ恵みの中で生かされていることを感謝いたします。  
イエスさまはいつも、悲しんでいる人、苦しんでいる人と共に歩まれました。  
私たちにもそのイエスさまの歩みに倣（なら）う心をお与えください。  
私たちのこの献げものが、最も助けを必要としている人々のために用いられま  
すように。  
また、この人々との交わりを通して共に生きるものとならせてください。  
主イエス・キリストのみ名によって アーメン

## 教区婦人会からの声

東北教区婦人会 会長 ソフィア 赤坂康子

青森、秋田、岩手、山形、福島、宮城の六県からなる東北教区の婦人会は、広範囲に渡りますので、集まりを持つには大変です。冬の期間も長く雪に対する心構えも必要ですが、四季折々の自然の美しさは素晴らしいです。

教区婦人会役員会は二年毎に県単位で回ります。引受け困難な県が出てきたために、昨年の総会ではそのような場合は次の県に回すということになりました。総会のない年は県毎にブロック会を開催します。教区婦人会役員会から話し合いの特別なテーマが出される場合もありますが、自主的に考えて楽しい集まりや研修会等を企画します。

問題点はやはり会員の高齢化と減少です。現在の婦人会数は110名程（個人会員五名）で、婦人会が存在しない教会に個人会員を呼び掛けている。個人会員への理解がまちまちのため、アンケートを実施しました。これから結果をまとめていきます。

「息吹きを受けて第二集」によりますと日本聖公会婦人会のあり方が繰り返し検討され、模索が続いた様子がよくわかります。感謝箱献金を第一の存在目的にしたことは先を見通した素晴らしいことであつたと感じます。昨年は仙台にて、リグリマ・ジャパンの上澤伸子さんの報告会を開催できました。また日聖婦の感謝箱献金から岩手県難病・疾病団体連絡協議会へ、災害被災者・東日本大震災被災者支援積立金から「金石支援センター」に「望」に支援をお届けいただきました。東北教区の感謝箱献金は会員の皆様に身近なお献げ先の希望をお聞きし、台風19号の被災者支援、カナン園、チャイルドラインにお届けしました。「最も助けを必要としている人々のために用いられますように…」と感謝箱献金の箱に書かれています。私たちはその人たちのことを覚えるためにも、いろいろと学び、成長して、神さまの御心に沿う働きが出来ますようにと願います。先達が開かれた感謝箱献金のお働きに与かることができて感謝です。

### 感謝箱献金事務局 チャブレンから

司祭 エレミヤ・パウロ 木村直樹（大宮聖愛教会）

「感謝」は大和言葉に直せば、「ありがとう・ありがたい」ということになります。「ありがたい」は漢字で書くと「有り難い」となります。有るのが難しいということです。物事を、すべて当たり前だと思っていると「有り難い」という気持ちが薄れてきます。健康なときは、健康であるのが当たり前だと思っているので、自分が健康であることを「有り難い」などと思いませんが、ひとたび病気になると、健康であることの有り難さが分かります。ですから感謝の気持ちというのは、幸いなとき、豊かなとき、健康なときを、当たり前だ、当然だと思っていると、生じにくくなるということです。今、こうして自分が生きているということは「当たり前」ではないのだ、「有り難い」ことなのだ、神によって生かされている本当に「有り難い」ことなのだと感じることが、感謝の思いの源だと思います。





## 感謝箱とわたし

聖職候補生 ヒルダ 藤田 美土里

聖公会神学院 3 年



### プロフィール

出身：東京都武蔵野市

出身教会：池袋聖公会（現、池袋伝道所）

生まれと育ちは三光教会

経歴：デザイン関係の職場経験がありますが、それ以上に  
二人の子どもの子育ては、私を育ててくれました  
2017 年聖公会神学院入学

趣味：ものを創ること。美術鑑賞。空を眺めること

聖公会神学院での 3 年間の学びの時をお支え下さいましたことに感謝致します。被献日献金の活用としてご購入頂きました書籍は、卒業を控えて尚学びの足りない私の財産となり、今後の支えとなってくれるでしょう。本当にありがとうございました。感謝箱献金の活動は 126 年前の日本聖公会の初期から始まり、これまでも多くの人々を支えてきた活動だとコアスタッフの方が教えて下さいました。そして、「最も助けを必要としている人々」という祈りの中に込められた「神の働き」のための活動であることに身の引き締まる思いが致します。この活動は、一人ひとりが繋がり、支えられることによって支えることの大切さを、また、互いに支え合い、繋がっていくことの大切さも教えてくれるものでしょう。

感謝箱献金の活動の始まった日本聖公会の草創期の歴史を学びましたが、自分自身が女性であるだけに、特に女性の宣教師の方々が何故はるか彼方の日本まで来られたのか、その情熱に関心があります。彼女たちもきっと多くの祈りによって送り出されたのでしょう。一人の宣教師の働きの後ろには多くの女性たちの祈りがあり、このような祈りの中から始まった感謝箱献金の活動が日本にも伝えられたのかと想像します。この頃の活動は、神への強い信仰から始まったことはもちろんですが、今まで家庭や小さなコミュニティの中だけで過ごしていた女性たちが、教会や学校など活躍の場を社会に広げていく中で、次第にネットワークが広がり、この繋がりが活動を活発化させたと思っております。日本に伝えられた感謝箱献金の活動は、その歩みの陰に大変なご苦勞もあったことと思いますが、どれ程多くの人々がこの祈りに加わったのかと思い巡らせた時、人の力では成し得ない神の働きを感じます。

感謝箱献金の活動が築いてきたネットワークを活かし、これからも神様の導きによって支えられ、広がっていきますようお祈りいたします。

### 編集後記

「ガリラヤのほitori」33 号をお届け致します。  
原稿を執筆頂きました皆さまに感謝申し上げます。  
今号ではお献げ先の「ニームの会」山下代表の訪印報告と「ワンダタイム」の活動報告を掲載致しました。  
皆さまがお祈りと感謝をもって、お献げ下さいました献金がそれぞれの地で活かされております事をお憶え頂き、今後とも感謝箱献金を宜しくお願い致します

永井眞由美



日本聖公会婦人会感謝箱献金事務局

〒297-0032

千葉県茂原市東茂原 10-192

永井方

電話/FAX 0475-24-6915

E-mail kansyabako@gmail.com